

ポケット ジャーナール



局延長戦でも決まらず、PK合戦4対2でパープルサ



「オーレノKOBE」の記念すべき第1回応援ツアー

★誕生日ありがとう運動



私の出会った宝子たち (17)
— 僕の友達は音楽 —

君 僕の名前は、N・Tです。年齢は、二十四才。

美人のお姉さん二人にかわいがられて育ったので、少しわがままで甘えん坊な所があります。しゃべれるけど、普段はほとんど話しません。

機嫌がいい時だけ話しかけられること、返事をするだけです。仕事はあまり好きではありません。

いつもは目を閉じて下を向いていますが、音楽が流れてくると、急にリズムをとったり、大きな目をキョロッとあけて嬉しくなってしまう。

歌も大好きで、古い歌から新しい歌迄、知らない歌はなくらいどんな曲がかかっても、いっしょに口ずさんでいます。

特にテンポの早い曲が好きで、特に立ち上って踊ります。楽器を持たせてくれるもの。

抜群のリズム感で、どんな曲でものりまくって、時々奇声をあげていつも僕はどこへ行くんだらうと、自分でも不思議なくらいです。

だから僕の元気のもとには音楽です。シューンとしていたら、にぎやかな曲をかけてね。

たちまち元気になるからさ。(N)

誕生日ありがとう運動本部 〒610 神戸市中央区御幸通八―六

神戸国際会館一階郵便局の隣 TEL・FAX ○七八―二二―二二四

最終ごひょうプリンセスフラワー



最終審査で3人のプリンセスが誕生した

★94フラワープリンセスもようご、みどりの日に誕生花と緑あふれる兵庫県のシンボルとして、兵庫の花づくり推進協議会が募集をした94フラワープリンセスもようごが、四月二十九日の「みどりの日」に、兵庫県フラワーセンターにおいて、応募総数三二五人の中から選考し決定。

審査基準は、フレッシュで健康的。兵庫の顔として公式行事で活躍可能。兵庫県内産花きのイメージにふさわしい親しみやすく明る

い女性であること。そして第一次、第二次、第三次と選考の結果、庵袋美香さん(19・加古川市・甲南大2回生)が代表プリンセスに、武田巳佳さん(20・西宮市・会社員)、田中志保さん(22・芦屋市・会社員)がプリンセスに選ばれた。

★オーレノ川鉄サッカー部 5月8日京都の西京極スタジアムでJFL第5節、来シーズンより神戸に移転することになった川崎製鉄サッカー部と京都パープルサンガの試合が行われた。

この日は「オーレノKOBEBE 神戸にプロサッカーチームをつくる市民の会」が川鉄応援バスツアーを企画、バス2台、総勢120人のサッカーファンが集まった。試合は1対1のまま、後半途中、突風によりスタンドの屋根の一部が落ちるアクシデントがあり中断、結

ンガが勝った。前半快晴、後半雷雨の中での声援に川鉄サッカー部も大健闘、負けはしたものの、サポーター達も応援の手応えをつかみまずまず満足したようだ。

★関西日印文化協会が創立三十五周年の記念誌発行文化交流を通してインドと日本の橋渡しをしてきた関西日印文化協会が創立三十五周年を迎え、その記念誌「日印文化」を発行した。

記念誌ではこれまでほとんど研究されてこなかった在日インド人を特集。在留インド人の動向から彼らの暮らしぶりまで、あまり知られなかつた在日インド人の実態を様々な角度から興味深くレポート、インドを真に理解するための貴重な資料として大きな反響を呼んでいる。ちなみに在日イ

インド人の四分の一が神戸に住んでいるという。

尚この記念誌の希望者には実費で配布してくれる。



■お問い合わせ・申込先 関西日印文化協会 〒651-11神戸市北区鈴蘭台東町9-7-26 電話078-591-5633 FAX078-593-188 57(記念誌はなるべくFAXかハガキでお申し込み下さい)

★海外に関わる日本人への警鐘のレポート発刊

神戸在住のフリーライター 渋谷幾三さんが新風書房よりドキュメント「アフリカの現代日本人達」を出版した。

かつて若者達のロマンの対象であったアフリカ。今では多くの日本人が住み、多くの旅行者が訪れるようになったが、現地では日本人の起こす事件や問題が続発している。この本ではそ



んなアフリカの日本人社会と旅行者の実態と病理をレポート。現地人への差別、アフリカ男性を求めている女性等々、渋谷さんが見たものは現在日本が抱えている最もダメな部分であった。

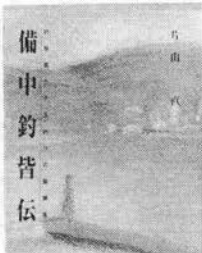
益々海外と接する機会が増えていくなか、改めて日本人ということを考えさせられる衝撃のドキュメント。千五百円。

★備中釣りの神髄をこの一冊で

画家の片山直さんが、神戸港和田防波堤に伝わり定着した「備中釣り」の神髄と醍醐味を記したエッセイ「備中釣皆伝」(交友プランニングセンター刊)を出版した。



片山 直さん

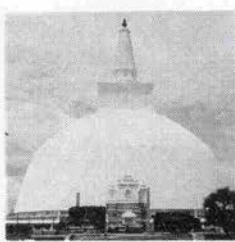


「備中釣り」とは、掛竿を使い白昼大型チヌを釣ること

とで、現在は和田防波堤のみで行われている手法。自ら「神戸備中釣保存会」の指導員も務めている片山さんが、この独特の釣りがたを後世へ残したいという願いを込めてペンをとった。備中釣りを回想しての、歴史、人間模様、技術、釣りの光景などが、自らのイラストと味わい深い文章で淡々と綴られている。千八百円。

★スリランカ展

(財)神戸国際交流協会は在日スリランカ大使館との共催で「スリランカ展」を神戸貿易センターで開催している。これは発展途上国からの輸入促進を目的に実



仏教遺跡「ルバンベリセヤ大塔」

史遺産、観光情報などが併せて紹介されている。

◇日時 6月1日(水)～7月10日(日) 10時～17時 火曜休館
◇会場 神戸貿易促進センター(ポートライナー「市民広場駅」西)
◇入場料 無料
■お問い合わせ (財)神戸国際交流協会 貿易促進部 電話078-303-0030

★ヨガで自己開発を

「毎日の生活の中の一瞬一瞬をヨガ行法と考える『生活ヨガ』を提唱しています。取り組む気持ちがおこった時が『ヨガ』のスタートなんですよ」と山本ヨガ研究所主宰の山本正子さん。5月にJDCより出版された『ヨガ・幸福への招待(1300円)』はヨガを始める人、ヨガを深めたい人への山本さんからの力強いメッセージとなっっている。体の各部位のトラブルに効果のある様々なポーズ、呼吸法やマタニティヨガを、写真を多く取り入れ分かりやすく解説。食事療法の紹介の後には、ヨガの最終目的である「瞑想」へと続く。山本さん自身の体験や、神の化身「サティア・サイババ」とのインドでの出会いについてなど、読み進むうちに全宇宙にひろがる精神世界



山本 正子さん

研究所(神戸市灘区水道筋6-1-3
3 番 078-1861-1025)まで。

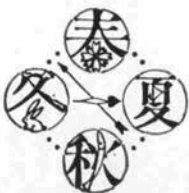
★心豊かなリサイクルライフ
フを実践してみませんか
リサイクルライフを実践
している方のためのハンデ
イーな情報ガイドブック
「得々リサイクルSHOP
ガイド関西版」がリサイク
ル文化社より出版された。



に引き込まれる。自分の体
と心に向き合い、本来持っ
ている力を信じることによ
り目覚める、健康、勇気、
希望。自分自身を模索中の
方は是非「一読」を。

■お問い合わせは、書店 山本ヨガ

花 時 計



★「プロデューサー」の
登場こそ俟たれる
都市の活性化のために
どんな方法があるのか必
要なのかということにつ
いては語り尽くされてき
た。が、可成集約された
「観客誘因」として
1 歴史 2 フィクション
(物語) 3 リズム&テイ

関西版は、好評を博した全
国版、首都圏版に続き発行
されたもので、衣類、家具、
CD、ギフト券等あらゆる
分野のリサイクルショップ
九百三十三軒を網羅。ほか
に、地域別・月別のフリー
マーケット情報や環境団体

スト(音楽&うまいもん)
4 ガール&ギャングブル
5 サイトシーン(景色)
6 ショッピング(買物)な
どが挙げられている。こ
れらの要因に加えて、都
市の活性化に必要な手法
として、イベント・オリ
エンテッド・ポリシーと
いうことを言ったのは、
作家の堺屋太一氏であっ
た。この考え方も確かに
一世を風靡して、都市の
活性化、街づくりによく
採り入れられてきた。そ
れは、現在でも飽くこと
なく続いている。従来の

の情報紹介等、トータルな
リサイクル情報が満載され
ており、心豊かでオシャレ
なりリサイクルライフを提案
している。



この本を読者三名の方に
プレゼントします。左記の
要領でお申し込み下さい。
■応募方法
電話番号を明記の上、月刊神戸っ
子「ポケットジャーナル」リサイ
クル本プレゼント係。締切は
6月22日(水)。当選者は小誌よ
り御連絡申し上げます。

地方博も、パビリオン形
式から、多様なイベント
方式に切り変えられてき
つつある。
思えば、これらの流れ
に必要なことは、イベン
トの地元文化への密着で
ある。その為に必要な
は「プロデューサー」の
登場である。所詮、文化
催事ではボランティアによ
って成り立つが、地元の
状態も十分理解して催事
を組み立てられる「プロ
デューサー」を育てなけ
れば文化は育たない。
△▽

● KOBÉ POST

★日本郵船神戸コンテナ・フレ
イト・ステーションが5月30日(月)
に、六甲I・コンテナ船埠頭第6
・7階に竣工。財団法人神戸
港湾頭公社松浦勢一理事長。根本
二郎代表取締役社長)

★神戸地下街株式会社(田淵榮次
代表取締役社長)の役員新任ご紹
介。安岡利美(代表取締役・専務
取締役) 石村由喜雄(常務取締役)
大海一雄(設備担当・常務取締役)
★日本電信電話(株)の神戸支店長
に井上登氏が新任されました。

★コナミ工業の上月景正氏が会長
兼務で社長に復帰。
★5月19日、元ビオフェルミン製
業社長の百崎展雄氏が急性肺炎の
ため死去(89才)。社葬は6月20日
中央区花隈町にある日本基督教団
神戸教会で。喪主は百崎俊郎氏。
★5月3日(祝)。中西美代子さん
(65才)が、神戸アドベントスト病
院で、ガンと闘病の末死去。同夜
7時から病院の教会で御葬儀が。
ご冥福をお祈りいたします。

★アーチストの植松圭二さんの和
子夫人(45才)が、5月20日(土)神
戸アドベントスト病院でガンのた
めに死去。22日(日)の午後1時か
ら西宮市の順心寺でご葬儀がとり
行われました。ご冥福をお祈りい
たします。

★6月11日(土)デザインナーの藤本
ハルミさんが、東京プリンスホテ
ルにおいて、日本ネットロビカル
協会(義美代子会長)の主催による
「4パルバーティ&ファッショ
ンショー」を「ボージェムール
3F」で、午後3時・午後5時は
(お茶とシ)・3000円、午後
7時(ディナー)・会員250
00円ビジター28000円)と
3回に亘って開催。

★申込/神戸ネットロビカル協会
事務局 078(242)5690 藤本ハル
ミ迄

お申込/神戸ネットロビカル協会
事務局 078(242)5690 藤本ハル
ミ迄

びっと・いん



★フランス料理が身近に楽しめるレストラン

去る3月に三宮サンセット通りにオープンしたのが海の幸フランス料理と神戸牛ステーキのレストラン「マリナーセゾン」。

瀬戸内海の新鮮な海の幸をふんだんに使い、素材を生じた料理が持ち味。日本料理・中華料理の手法も取り入れ、ポリシーを持った独自のフランス料理と神戸牛ステーキを提供してくれる。味には絶対の自信を持つ当店だが、リーズナブルなお値段がモットー。3千9百円のセットメニュー、5千円の神戸牛ステーキコース等、何ともお得。「お店はお客様が作るもの。わがままを言ってもらえるお店にしたい」と総料理長兼支配人の増岡さん。気品がありながら肩肘張らない雰囲気

気だから、構えることなく誰でも気軽に足が運べる。プライベートルームも完備されており、パーティや宴会にも利用できる。神戸っ子大スイセンのお店です。



店内はゆったりした空間でくつろげる

■中央区北長狭通2-15-17 17時～24時(日曜・祝日のみランチあり12時～15時) 木曜休
電話 078-391-5670

★パールシティの和食処

ホテルパールシティ神戸1階の和食処「花真珠」が新装オープン。椅子席と座敷3室(予約制)があり、和紙や間接照明を使ったネオ・ジャパネスクな空間に

なっている。テーブルとスーブルの間にゆったりとスペースがとってあるので、商談を兼ねたビジネスランチ、会食にも使いやすい。



和服の女性が笑顔で迎えてくれる

お昼の献立には、天麩羅御膳、刺身御膳、ぞうすい御膳(各1600円)、季節御膳(2千円)などがあるが、6月からさらにリーズナブルな定食ができるそうなので、要チェック。夜は季節の食材を使った懐石が3800円〜7千円。神戸空港旅客ターミナルが営業を開始すると、神戸では関西国際空港に一番近くなるこのホテル。海外への行き帰りのお客様をもてなすにもいいですね。

■中央区港島中町7-15-11
ホテルパールシティ神戸1階
電話 078-303-0100 11時半〜14時 17時〜22時

★活きのいいのは魚だけじゃない!「うおほり」

新神戸オリエンタルホテル

ル地下三階、土産物店を通り抜けた奥にある大きな水槽。中には多種類の魚、えび、あわびなどが勢いよく泳ぐ。活魚・鮨・割烹の店「うおほり」が以前同じ場所にあった店を引き継いでオープンしたのは4月16日。薄利多売覚悟のそのサービスには頭が下がる。まず驚くのがその安さ。おこぜフルコース8千円など、本当にいいの?と言いたい。神戸では飲めない全国の銘酒も揃い、通にも喜ばれること間違いなし。「食べたい魚、飲みたい銘酒があれば一週間前に電話して下さい。ご期待に答えますよ」とこれまた活きのいい料理長。口コミ体質の神戸っ子で早くも賑わっている。



「うまい魚を食べて下さい!」左は店長の奥野さん

■中央区北野町1-3 新神戸オリエンタルホテルB3 電話 078-12260 11時〜22時

歌って踊って、ありがとう 兵庫大佛まつり

三条 杜夫〈放送作家
フリーアナウンサー〉写真／森田 篤志



日本三大仏のひとつ*兵庫大佛*が能福寺にある

「赤いたすきかけた大仏さんが出征しはったんや。行かんといてゆうて、市民が泣く泣く見送ったんやで」何度か、こんな言葉を耳にした。

奈良の大仏、鎌倉の大仏と並んで「日本三大仏」といわれた兵庫の大仏が第二次世界大戦の金属供出で解体され姿を消した。「昔、能福寺に大仏さんがいてはったんやで」懐しむ市民の声が届いたのだろう。平成3年5月、大仏さんが帰って来はった。総工費5億円、身の丈11m、台座7m、重量60t。——平成の大仏建立は、まさに神戸市民の血と涙と汗の結晶だった。実に47年振りによみ返った兵庫大仏を歓迎して誰れいともなく始まった「兵庫大佛まつり」が、今年、第4回目を迎えた。去年よりは今年、今年よりは来年、と、ますます大仏に心を寄せ、みんなで盛り上ろうと願う市民の意欲が「兵庫大佛ありがたや節」という歌まで誕生させて、二代目大仏は初代に負けぬ、いや、それ以上の善男善女の心の支えとして定着しつつある。



(左上から右へ) 参道にはたくさんの屋台がならぶ。堀郁子さんと「音楽の家」門下生によるシャンソン。花柳五三輔さんの祝舞。境内には古道
具屋が店開き。丹野サヨ子さんらのハワイアン。

おもちゃ箱をひっくり返したように
楽しいプログラムの数々

JR兵庫駅を南に徒歩7分。能福寺は平清盛が剃髪した寺として知られるところだ。その境内に大仏はデンと青空を背に鎮座している。緑青色の大仏が周囲の木々のみどりに映える季節に大仏まつりは幕を開く。

5月9日(月)、午後3時、境内に「ゴーン」と鐘が鳴りひびいた。それを合図に餅まき、豆まきが行われた。豆といっても、大豆ではない。ピーナツだ。そのあたりがハイカラ神戸らしくておもしろい。大仏さんの奉納といっても、日本調のものだけではない。シャンソン、ハワイアン、サンバ……洋の東西をミックスした楽しいプログラムがびっしり用意されて、まるでおもちゃ箱をひっくり返したようなバラエティに富んだエンターテイメントが次から次へとめくるめくように展開されるのが、この大仏まつりの自慢なのだ。

オープニングを飾る花柳五三輔さんの祝舞「三番叟」が、厳しゆくさの中にもはなやかさをかもし出して胸を打つ。兵庫区連合婦人会の新舞踊は、親しみやすい歌に乗せての踊りが見る人の心をなごめてくれる。

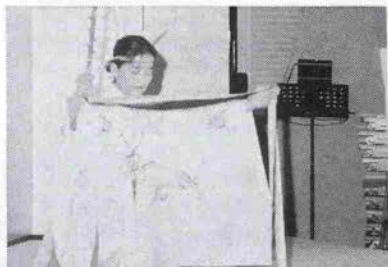
町娘のかれんさを表現した「花ぐるま」や荒波にめげず雄々しく生きる様を踊りにした「人生祝い唄」など、日ごろのエプロン姿とは違って変わったお母さんたちのあでやかな着物が目をくぎづけにした。続いてのシャンソンは、堀郁子さんと「音楽の家」の門下生たちお得意のステージが、早くも観客を酔わせる。

ちょっと変わりダネとしては、神戸新聞文化セ



兵庫県連合婦人会のみなさんによる「兵庫大佛ありがたや節」

神戸神事芸能研究会の「筑紫舞」



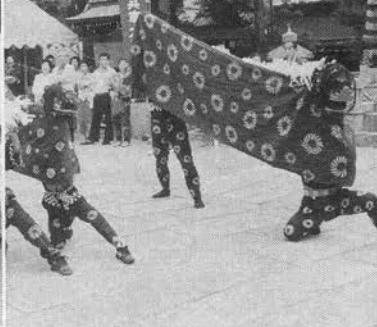
兵庫木遣り音頭

ンター作詩作曲教室の発表。講師の作曲家・小野瀬晃一さんは「兵庫大佛ありがたや節」の作曲者でもある。「皆さんが教室で習って作った歌でもしヒットしたら、孫子の代まで著作権料が入って喜ばれますよ」と、ほほえみを誘った。

能福寺講堂のステージがとりわけはなやぐのはハワイアンフラダンス・ショー。プアラニサヨコと丹野サヨ子さん率いるチームが「南国の夜」「カイマナヒラ」など、甘いスチールギターの調べに乗って、常夏の国・ハワイへといざなってくれた。

二宮神社を拠点とする神戸神事芸能研究会の「筑紫舞」の後は、兵庫木遣り音頭が披露された。国際港都・神戸の原型を築いた平清盛。彼が手がけた経ヶ島の名残りを伝える兵庫運河。そこにたくわえられた材木をあやつる男たちの心意気をほうふつさせる木遣り音頭は、保存会メンバーたちの熱演で、神戸っ子の胸をおどらせた。

初夏の陽ざしがようやく、たそがれの色を感じさせようとするころ、このたび作られたばかりの「兵庫大佛ありがたや節」の発表が行われた。作詩は月刊「神戸っ子」編集長の小泉美喜子さん。実は、彼女は知る人ぞ知る作詞家でノートにびっしりたくさんの詩を書き貯めている。作曲・小野瀬晃一さんとのコンビで、昨年には「フルーツフラワーサンバ」を打ち出して話題を呼んだことは記憶に新しい。さて、大仏音頭、歌うは神戸のタ1坊。ハリのある声で、朗々と歌い出すと、兵庫連合婦人会の面々が踊り出す。この曲、若柳吉金吾さんの振付まで用意されているという豪華版だ。
ㄨ ありがたや ありがたや 兵庫大佛ありがたや
兵庫津の道 ひとりで詣りや 美男におわす



若柳吉金吾さんの「越後獅子」



(左上から右へ)カラオケ大会で優勝した間曾さん。生田神社獅子舞。林秀姫さんの韓国民族太鼓。矢野正文さん指揮の神戸フラウエンコールによるコーラス。

大佛つあん……

軽快でそれでいて哀愁もただよう、実にいい歌だ。たかはしもうさんがイラストを描いたカセットテープが飛ぶように売れた。

夜の部の呼びものは第1回カラオケ大会。兵庫区はもとより、神戸市近郊から参加の30名余りが得意のノドを競い、13名が翌日の決勝大会に進出することとなった。

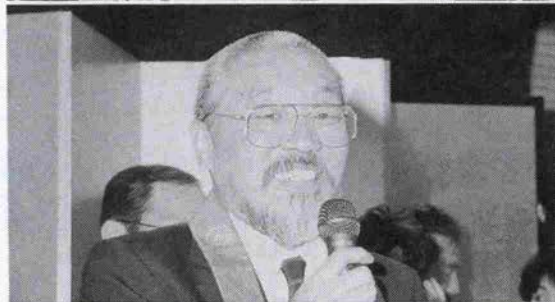
大仏と共に神戸っ子の平和をねがう

名物行事に

翌くる5月10日(火)も天候に恵まれた。参道に軒を連らねた一口カステラ、綿菓子、イカ焼きなどの店が縁日ムードを盛りあげる。司会をやりながら、僕が息をのんだのは、若柳吉金吾さんの「越後獅子」。昔、映画で観たあの特有の姿で、吉金吾さんは境内狭しと踊りまくった。まるで、百年も二百年も時計が逆回りして、僕は本当に越後獅子や角兵衛獅子が活躍した時代に迷い込んでしまったのではと思うほど感動した。大仏の台座の石段を一つ歯の下駄でピョンピョンと跳びはねるクライマックスには、大仏さんの顔が確かに一瞬、ほころんで「ほう」とため息をもらささったのを、僕は感じた。「大仏さんも喜んでくれるは素晴らしい催しものの司会をよくぞやらせてもらったものだ、思わず合掌した。

まり遙さんのポップスナンバー、音楽家・矢野正文さん指揮・神戸フラウエンコールのコーラス、林秀姫さんの韓国民族太鼓と唄に続いて、月刊神戸っ子サンパチームのサンバがムードを一

新、いやがうえにもお祭り気分を盛り上げた。
生田神社獅子舞、神戸青年合唱団の和太鼓と、



(上) 高橋孟さんらの似顔絵コーナー
(下) 雲井世雄住職



熱唱する三代沙也可さん(上)
と神戸のター坊。

まつりはぐんぐんフィーバーしていく。

今年の呼びものは、何んといってもカラオケ大会の決勝戦だ。2時間余りにわたる接戦の結果、兵庫区から参加した間曾松吉さんが「父娘坂」で大仏大賞を獲得した。会場に立見が出るほどの熱気で声援を送ってくれた観客を魅了したのは、ゲスト歌手の神戸のター坊と三代沙也可のステージ。観客はうっとりとして聴きほれ、われんばかりの拍手でたたえた。たかはしもうさん、初田寿さん、佐藤廉さん、大橋良三さんから文化人のゲスト出演も見もので、この大仏まつりがいかに幅広い人たちに支えられているかを実証して、今後の発展を予知させた。

二日間にわたるまつりのフィナーレは、誰れいとうとなく始まった「兵庫大佛ありがたや節」の大合唱。出演者、観客一体となつての大熱唱に、演出を担当した岡田美代さんまで手拍子を打って、関係者の健闘をたたえる。円満な顔をいっそう丸くしてニコニコと見守る住職の雲井世雄さんも、これほどの満足はないといった表情。

へ世界の平和は神戸から、一顧成就 夢成就
サテ ありがたや ありがたや……

講堂からもれ出た声が午後9時になろうとする境内におよんで、夜空に浮かび上った大仏さんが「わしはどんなことがあつても出征はしない」と、約束してくれたような気がする。来年は5回目を迎えるこの大仏まつり、地域の人たちの熱意欲に支えられて、神戸っ子の平和をねがう心を広く全国にアピールする名物行事として発展していくに違いないと僕は思った。

K.F.S. NEWS 175

KFS20周年に向けて—KFSトーク。



トークKFS。春秋年2回のKFS名物として催しておりました。立亀先生の公開講座は、私共活動の中核ともいえるものでした。しかし先生の突然のご逝去により新たな企画が必要となりました。20周年のかかわりも、ふまえて会員皆様方のご意見をお聞かせ下さいと始まりました。

「年に1回にしても良いから名の通った先生を招請する。たとえば、大内順子さんとか水野正夫さん等。KFSのメンバーで講師の出来る人が居られるのだから順次お願いし、異業種の集まりだからその特徴を充分に出した専門的なお話を聞かせて頂く。昨年神戸市より初めてマイスターに認定された方々にお話を伺っては。神戸の生活文化追求」等々活発な意見が続々と

出ました。9月16日には20周年記念イベントとして、コーディネーターに小室豊允氏、パネラーに新谷琇紀氏、武田則明氏、堀江珠喜氏、高野多美氏の4氏をお迎えし「神戸いま～みらい」をメインテーマに「激論3時間」を開きますが、その中でKFSのやるべき色々な意見が出てくるだろうから、それからじっくり考えてはと慎重派や、小室豊允サロンを開いて色々な分野からインターナショナルなお話を聞かせて頂くという意見もありました。「私達が受講したファッション市民大学が今の状態では、なくなったも同然。なんとか、我々の手でもう一度再開出来ないのか。あの素晴らしい感動を、若いファッションに感心のある人達に味わってほしい。お互い勉強した仲間同志が

講座の終わった後このまま別れるのは惜しいと出来たのが、今のKFS。原点に戻って、何歳になっても一生が勉強、これで良いという事はないのだから、教わるのではなく、自分で学ぶ姿勢が大切。いくつになっても貧欲に。KFSの仲間お互いに声を掛け合って、メンバー同志がお互いを知る為ロースタの作成を。部会を作っては。一般会員にマンスリーの当番をしてもらおう。会社見学を希望する。明日からすぐ役に立つ話を。」色々な意見がありがとうございました。150名とはいえませんが、会員皆さんの希望に添えるよう努力する事を、お約束致します。

いや久し振りにKFSが燃えました素晴らしい意見を、たくさん。皆さんもKFSが好きなんだなあ——。

中島正義

●マンスリーサロンのお知らせ

とき 6月17日(金) 6時30分より
ところ 神戸市勤労会館 403号室
神戸市中央区雲井通5-1-2
☎(078)232-1881

講師 杉村啓介氏

昭和55年京都大学経済学部卒業、神戸市入庁
1990年11月より1994年2月までミラノ駐在員
現在 神戸市企画調整局総合計画課総合計画
担当係長

テーマ ベネチアにみる
イタリアの都市の盛衰

会費 一般 1,000円

連載小説〈最終回〉 第18回神戸文学賞受賞

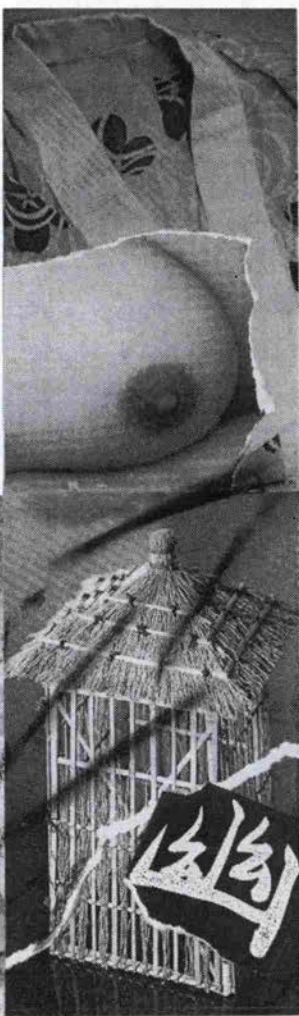
慶長五年九月十五日

楽 ミユウ

コラージュ／

田中 徳喜

駆け落ち



「もどって支度しよ」

為助はさなえの肩を抱いて、屋敷のほうへ歩くようにうながした。さなえは仕方なく、為助に従った。

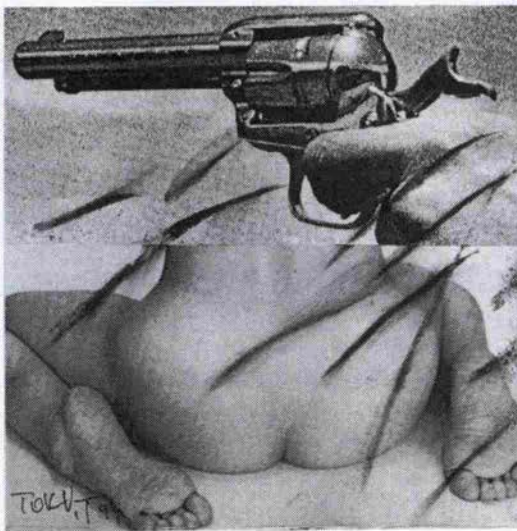
「ゆっくり行こ。こけたらあかんのやろ」

為助は指でさなえの腹をさがし、そっと撫でた。それから、ひどい雨やなと言って、口の中に入りこんでくる雨を、唾といっしょに吐き出した。

さなえはもう泣きやんでいたが、為助だけを嘔らせていた。涙を通り越したあとの、うつろな感覚がさなえを無口にしていた。

雨にうたれながら、為助は自分の何もかもを知っている、さなえは考えていた。とても気楽でいて、お前はこういう女なんだと見せつけられるような、どうしようもない窮屈さを感じた。

もう屋敷のすぐそばまで、来ていた。



「着替えをして、そんで…いや、あつたまってるから、」
為助はそこで口をつぐんだ。さなえの足が止まった。

男のうめき声が聞こえ、そのあと、女のひきつるような声があったのだ。

ふたりは屋敷に駆け込んだ。竈のまわりが、荒らされていた。さなえは急いで、はなと寝ていた部屋へ入った。

(はな、だいじょうぶ?)

さなえは口に出して言うつもりが、言えなかった。

薄明かりのなかで、床柱にもたれて、はなは座りこんでいた。片手に鎌を持ち、血だらけだった。

さなえと争助がきたのが、見えているのかいないのか、焦点のさだまらない目をしていて。口は半開きにあっていたが、そこから声は聞こえてこなかった。

着物は乱れていた。頭丈でよく働きそうな二本の足は八の字に、畳の上に投げ出され、胸元からは乳房がのぞいていた。全身に返り血を浴びたはなは、へんに大人びてみえた。

はなのすぐそば、さなえがほんの少し前まで横になっていた寝床の上に、頬骨の突き出た見知らぬ男が倒れていた。

引き裂かれた脇腹を手で押さえて、体を丸めていた。野仏にさせる願布のような小さな鎧が、結んでいる紐がとけて胸から離れていた。さなえがつくった握り飯を食べたのか、唇の横に、飯粒がついている。

男はもう生きてはいなかった。

(うちが、そばにいてやったら…。うちのかわりはなが…)

さなえは立ちすくんだ。はなを中心にして、部屋全体をぼんやり見つめた。一瞬だが、放心したはなの姿が、住職を殺した若い市右衛門とすりかわって見えた。

為助がはなに近づいて、かたく握りしめていた鎌を、奪うようにして取りあげた。そして、はなを抱き上げた。

小柄な為助の、どこにこんな強さがあったのだろうか

と、さなえは思った。

「着替えを」

為助が歩きだしながら、ささやくように言った。

「あつ、あつち」

さなえは自分の着物を置いている小部屋を指さして、為助の前を歩いた。

一步踏み出すたびに、膝頭が震えた。その震えとは無関係に、泥だらけの濡れた足の裏と、板張りの廊下が擦れ合ってキュツ、キュツと小気味のいい音をたてた。

小部屋にはなを座らせると、為助は出ていった。さなえは暗い部屋で、手の感触と勘で、はなの着物を脱がした。間近に血を見るのも、はなの顔を見るのも怖かった。

さなえは自分も脱いで、その水浸しの着物で、はなの顔と胸のあたりと腕、足をふいた。

はなは、人形のようにされるままにしていた。

「これ、水。急げよ」

為助が桶と手拭を持ってきて、すぐにまた出ていった。さなえは血をふきとった着物を丸めてから、明らかにつけた。

為助が用意した桶は、市右衛門が髪を洗うときに使っているものだった。

桶は買い替えたばかりで、新しくなった。木の匂いがした。削られて間もない木肌には黒ずみも、欠けたところもなかった。市右衛門は、そういう桶しか使わなかった。

桶の水で手拭を洗いながら、はなに付いた血を丁寧にふきとった。水は赤く染まっていた。市右衛門の桶を汚すことに、さなえは罪を感じた。

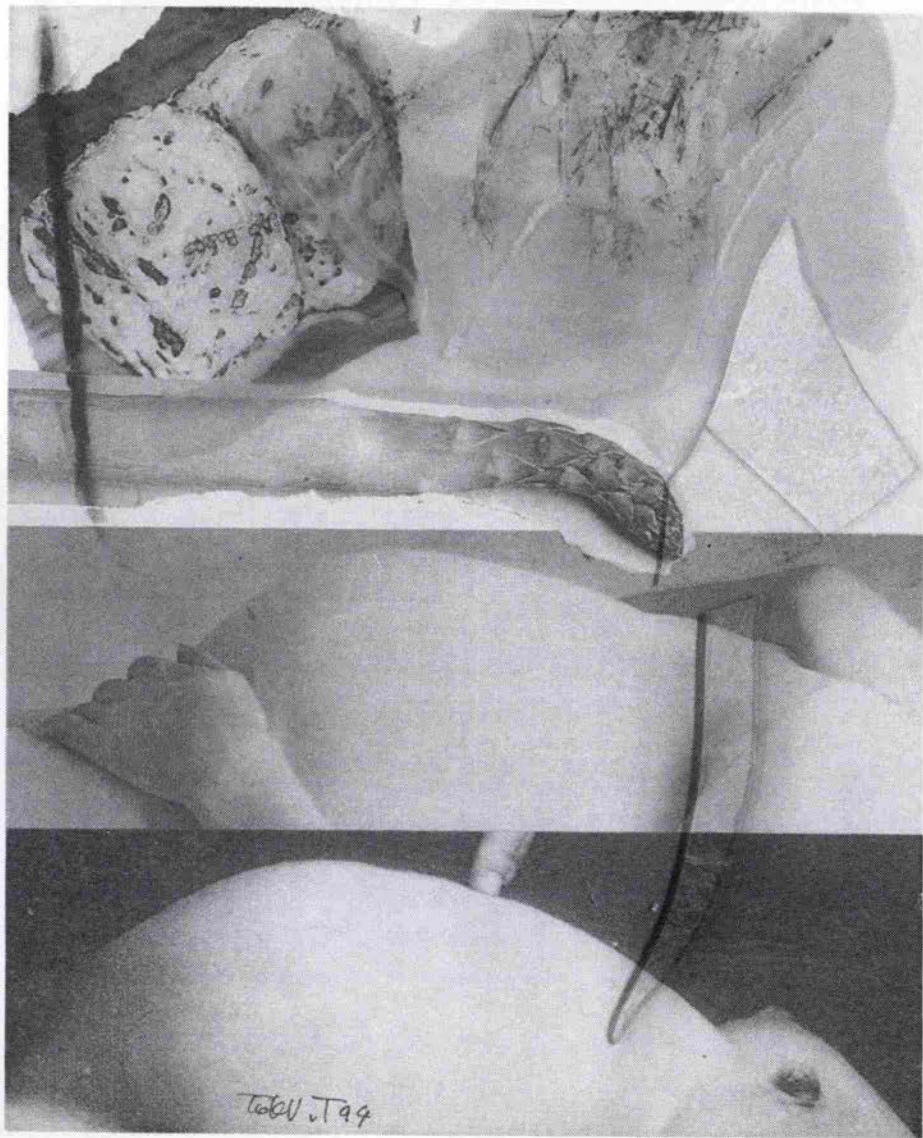
「きれい」

水の色を見て、はなが口をきいた。

確かに鮮やかな赤だった。

「そやな」

さなえは、はなが言葉を忘れていないとわかって、少



しほっとした。すると、死んだ男は戦から逃げ出したかっただけかもしれないという考えが浮かんできた。

男は戦が恐ろしくて、腹が減って、たまたま勝手口のあいていた家に入った。娘がいて、その娘が欲しくなった。男は娘の抵抗にあって、死んだ。

今年十一歳になるのはなは、用心のために置いていた鎌をつかって、男を殺した。知らない村で、家族に看取ら

れることもなく男は死んだ。男は兄と同じように、戦の犠牲になった者のなかの一人かもしれないと思った。男が死んだからこそ、そう思った。はなが生きていなければ、そんなことは考えなかった。

「まだか？」

離れたところから、為助のせかす声がした。

「もうすぐや」

さなえは、長持のなかから、はなが以前好きだと言っていた小袖を取り出した。

「これ、もう返してくれんでええから。着て」

さなえが渡すと、はなは両手でその小袖を抱えて持った。ふいに、はなの目に涙が満ちてきた。

「どうしよう。奥さん、どうしよう」

はなは泣きながら、小袖をつかんでいる手をさなえに見せた。

「この手で、人を。人を」

小刻みに震えるはなの手を、さなえは自分の両手で包んだ。

「だいじょうぶや。な、これ、着よう」

さなえは、はなの手から小袖を取って、着せた。着せ終わって、さなえが身支度を始めると、泣きながらはなは、さなえを手伝った。

為助にいそがされ、血の混じった桶の水も、死んだ男もそのままにして、屋敷をでた。

5 早朝

雨はまだ降っていた。やみそうになかった。

三人とも蓑と笠をつけていた。為助が松明で足元を照らし、真ん中にさなえ、その横にはなと並んで、一塊に繩で縛られているかのように体を寄せあつて歩いた。

さなえとはなはそれぞれ、枕元に置いていた小刀と木の棒を、蓑のなかに隠れた手に持っていた。争助は、死んだ男が、竈にたてかけて置いていた槍をもってきていた。

生死にかかわる何が起きて、不思議ではなかった。

三人は、まわりを取り囲む暗闇に向かって身構えながら、速足ではなの実家に向かった。

途中、家の戸締まりをしていたり、さなえらと同じような格好をして歩いている村人数人に出会った。短く声をかけあつたが、さなえと為助が寄り添って歩いていても、取り立ててどうこう言う者はいなかった。

二人のことを承知しているからではなく、村人には、戦が始まるうとしていた時に、他人のことを考える余裕がないらしかつた。二人が駆け落ちしようとしていると、勘ぐる者もいないようだった。

はなを実家に送りとどけた。別れ際、はなは雨の中を、外まで見送りに出てきた。さなえは、「いいから、戻って」と言った。それで、はなは戸口の方へ向き直ったが、その背中をさなえはさすった。別れを言うかわりにそうした。はなは二、三步、歩いてから振り返り、素早くお辞儀をして、家の中へ消えた。

はなの家をでてから、あの寺へ向かった。村を離れる前に、さなえはどうしても行っておきたかった。

「もうちょっとで、夜明けやで」

歩きながら、為助がさなえをなじるように言った。

恐らく、朝になったら戦が始まる。それまでに、村からなるべく遠い所へ逃げたほうがいいということは、さなえにもわかつていた。だが、寺へ行くぐらいの余裕はあると思つていた。

「ごめん」

さなえは頭を下げた。

夕方、はなのためにアケビとムカゴを取つた場所にさしかかつていた。この道を通つたのは、ほんの昨日のことだったとさなえは思い返した。

馴染んでいたはずの道は、だが、まったく別の道のように、なぜかよそよそしく感じられた。

「うち、この道、よう通つたわ」

さなえは無理やりに、そう言った。何か言つてほしかったが、為助は黙つていた。

山道へはいった。

道は雨で滑りやすくなつていった。雨が降つていなければどうということはない、短い、ごくゆるやかな上り坂を、為助に助けられながら、さなえは歩いた。

雨の雫は、胸や背中や腋や腹に容赦なくはいりこんできていた。

寺は雨に降られながら、たっていた。

人が住んだことはなく、そこで何事も起こらないまま朽ち果てたかのように、とても静かだった。

さなえは堂のなかに入った。うしろから、松明を持った為助がつづいた。堂のなかは、外と同じくらい雨が降っていた。

「ひどい雨降りやな」

為助は、不快をとおりにした笑い声をたてた。雨の日に寺へきたことはなかった。

「ほんま。ひどいなあ」

さなえは雨にさらされて、そのうち柱が倒れ、屋根が落ち、いつか堂が木と瓦の残骸になる様子を想像した。

「もう、ここへは、けえへんやろなあ」

さなえは奥の隅に、床の乾いた所を見つけた。そこにしゃがんで、住職とその女房のために、持っていた握り飯をそなえた。はなが殺した男が食べ残した握り飯は、二つだった。

為助は後ろにつつ立って、さなえのするのを見ていた。

握り飯に向かって、さなえは手を合わせ、住職と女房が淨仏するようにと心のなかで唱えた。それから、目を閉じた。すると、様々なことが思い浮かんだ。

寺の女房と市右衛門は駆け落ちしようとして、出来なかったこと、鉄砲をつくり続けて、この村で死んだ兄のこと。戦が終わって、自分と為助がいなくなっているのを知って、おまつがきつと嘆くだろうこと……。

「はよ、行こ」

為助がつまらなさそうに言った。さなえはしゃがんだまま、為助を見上げた。

「握り飯は、死んだもんやのうて、生きてるもんが食うもんやで」

為助はそう言うておいて、さなえから顔をそらした。

「こんどは、いつありつけるか知れんのに」

「うるさいなあ」

さなえは立ち上った。その思いつめた目を見て、為助は力なく笑った。

さなえは先に堂を出た。為助はうしろからついていったが、出際に、大急ぎでとってかえし、さなえがそなえた握り飯をひとつ、口の中に詰め込んだ。

雨は小降りになってきていた。

寺から、一息に坂道を下りきった所で立ち止まり、二人は村と、村につづく平地を見渡した。

真っ暗な中に小さく、松明のともしびの列が見えた。西の方角だった。ともしびの列は向い側の山にもびて

いた。それは死者の霊を弔う送り火のようであり、行儀よく並んだ人魂、そのもののようにもみえた。

(大勢の人が死んでいく)

さなえの心臓の鼓動がはやくなった。

さなえは思った。

恐らく、自分は市右衛門の子を産むのだろう。松尾山で市右衛門が死ぬとしたら、いや、生きのびたとしても、市右衛門の命を引き継ぐ子を産むだろう。そして、それが、これから先の為助との暮らしを、いつか壊すものになるのだろうと。

さなえは、今、市右衛門が愛しかった。

おまつもおまつのお亭主も、はなも、この村も、失おうとしている何もかもが、愛しかった。為助はもう、そばにいてもいなくても、どちらでもよかった。

さなえは別れてゆく人達を思いながら、ともしびの一つ一つを、じつと見つめた。

為助が持っている松明から、燃えてゆく木のはじける音が、聞こえた。

(母さんに、なるんやな)

ふいに、さなえは、そのことに気づいた。母さん、母さんと胸の中で繰り返して、言葉の響きを確かめた。

為助はさなえにみつからないよう、ゆっくりと口を動かし、少しづつ握り飯をのみこんでいた。

△了▽